

# 登山の基本（登山のHow To） 緊急時対応（番外）

## 私の最大のピンチ 生還と転機

広島県山岳連盟 事務局長 松島 宏

登山は楽しい。それは自然の真っ只中でただひたすら頂上を目指すといったシンプルな遊びだからだ。自分で目標を決め、それに突き進む。それは遊びの基本だ。そんな挑戦的な登山の中で1998年私は最大のピンチを迎えた。

自然は遊びだといっても容赦はしてくれなかった。当時46歳、それまで高度6000mしか経験のなかった私は7000m峰の登頂を目指し天山山脈のハンテングリ峰7010mとボベータ

峰7439mを目指した。運良くハンテングリ峰に登頂し、その勢いでボベータ峰に向かった。頂上直下7200mで日没となり、翌朝の登頂を信じ、キャンプに帰らず現場にとどまった。翌朝天候は急変し吹雪となった。それは地獄の始まりであった。猛烈な風と横殴りの雪で視界が悪く動けない。最終キャンプから1日で到達した場所からキャンプに帰るのに3日を要した。7000m峰への初挑戦だからそこがどれだけ危ない現場であるかを知らなかった。酸素が平地の三分の一、気温マイナス30度。高所衰退といってそこにいるだけで弱っていく環境だ。生物が活動できて体力を回復できる環境は6000m位までだ。このラインが生命のパーティカルリミットである。登頂を目指した日まで好天が続いた。幸運だけでその場に達した。その後の三日間の悪天候で私は死と直面することとなる。

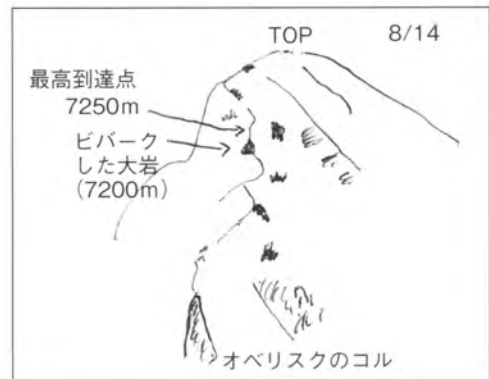
雪の中で簡易テントをかぶりシュラフカバー1枚で寒さに耐えた。凍死を恐れ最初の夜コンロを燃やし続けたことが災いした。燃料



登頂したハンテングリ峰 (7010m)



登頂に失敗したボベータ峰 (7439m)





最終キャンプとボベータ峰 アタック前日

が尽きた。二日目から火がない。これは水を作れないという悲劇であった。冷たい雪を口にするしかなく、益々消耗した。全身が凍死の危機に陥ると人間の身体は血液を体腔に集中させ末梢を捨てる。手足の血行は悪くなり水分不足と相まって凍傷は悪化する。標高7000mの最終キャンプにたどり着くのに三日かかった。キャンプに着き、コンロで水を作り、何リットルも飲んだが喉の渴きは癒えなかった。手足は凍傷で水泡ができ使い物にならない。意識は朦朧とし、家族の顔が走馬灯の様に現れた。この時は本当にやばいと思った。生まれて初めて死を意識し、明日の朝の自分の生存が信じられなかった。自力下山が困難となり無線でSOSを発した。なんとか自力で5000mまで下山しそこからヘリコプターで救助された。凍傷により両手、両足はひどい状況であった。幸運にも私の指はなんとか



98年8月14日 頂上を目指す

残ったが、パートナーは帰国後多くの指を失った。こんな極限状態の中で人間という生物に一番大事なものは水だということを実感した。水分さえ確保できれば少々ことはやり過ごすことができる。もうひとつ、身体が動かないくらいの極限状態に必要なものは「諦めずに生きて帰る！」強い意志である。ふらふらになりながら下山することに命を懸けた。過酷な自然の中での臨死体験は人間のちっぽけな価値観を簡単に変えてしまう。これだけ命からがらの生還を体験すれば、登山なんかやめてしまうのが正しい選択である。しかし、私はその4年後教師の仕事を辞め、山の仕事につくことにした。今も挑戦的な登山を続けている。一度死にかけて残った自分の命を好きなことに使ってみようと思った。家族はいまだに許してくれていないのだが。

(まつしま ひろし)



ピバーク3日目 死を意識して自分の写真をとる



下山後、レストランにて